

II Technique (作庭技法)

1 地 割

造園におけるマスタープランとも云うべき「地割」について、歴史的経過を記載する。

1.1 平安時代までの平面的な庭、

1.2 鎌倉・室町時代以降の山畔に作られた立体造形の庭

1.3.1 現代(中根・重森)によって作られた山畔への稀な地割による立体造形例。

1.3.2 現代(重森三玲)において平坦部に作られた立体造形の庭を中心にして例示する

1.4 現代(重森三玲)の視点を移動すると立体造形が連続的に変化する(多視点のビューポイント)

1.1 平安時代までの造形

奈良時代、平安時代においては、浅い池の周辺に所々に石を配する造形であった。基本的概念は阿弥陀堂などが立つ本堂周辺を栗石による洲浜の荘厳である。

但し、やや立体性のある石組がある事も注目したい。下記に示した東院の須弥山と毛越寺の須弥山石組である。



①東院 750:最下層園池を改修した下層園池(720~767年)



同左:更に改修した上層園池(767~784年)の須弥山石組



②毛越寺 1100頃:広大な池泉庭園の洲浜



同左:唯一の石組は須弥山と考えられる



③浄瑠璃寺 1107頃:池泉部の周辺部は総て栗石による洲浜



同左:中島はのみ「荒磯」の風景を象徴した石組



④平等院:洲浜の造形が主体である



同左:選び抜かれた点在する石組



同左:立体的石組みの萌芽

1.2 鎌倉・室町時代に山畔に作られた立体造形の庭は、やがて平坦部での立体造形になる。

古庭園の立体造形は、大半の庭は滝組に限定される。例えば下に示した事例は偶然にもすべて滝である。逆に考えれば龍門瀑を中心とした滝しか作っていなかった。つまりマンネリ化していたのである。また、大名庭園の場合は巨費を掛け大な築山を作り立体造形にしている。小石川後樂園、六義園、岡山後樂園など。一方、平坦部への立体造形は雪舟による常栄寺に始まり龍安寺に至り、江戸時代になると大徳寺(本坊)・圓通寺・桂家・東海庵と脈々と繋がっていた。しかし何といっても重森三玲の庭は大半が平坦部での立体造形である。その理由は山畔部の土地の確保が困難であったが、最大の理由は平坦部での石組の方が石同士の有機的な関連性をつけ易く動きのある庭になるから。



①苔寺: 階段状地形に合わせ



②天龍寺: 最古の雛壇状山畔部への石組



③保国寺: 横石と立石群の均衡



④常栄寺: V字型雛壇に徹底性



⑤萬福寺: 築山造成で立体造形



⑥青岸寺: 最深部には盛土までした地割



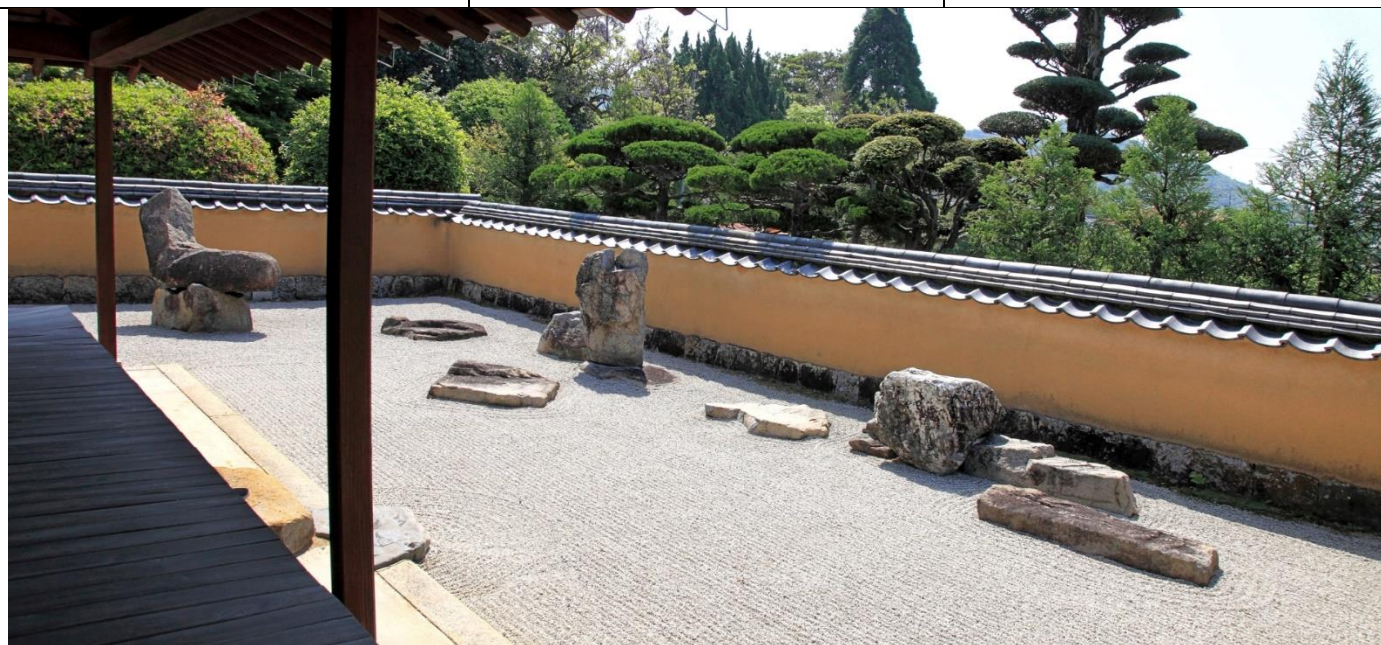
⑦岡山後樂園: 大名庭園代表例



⑧粉河寺: 擁壁部へ造園の迫力



⑨久留島家

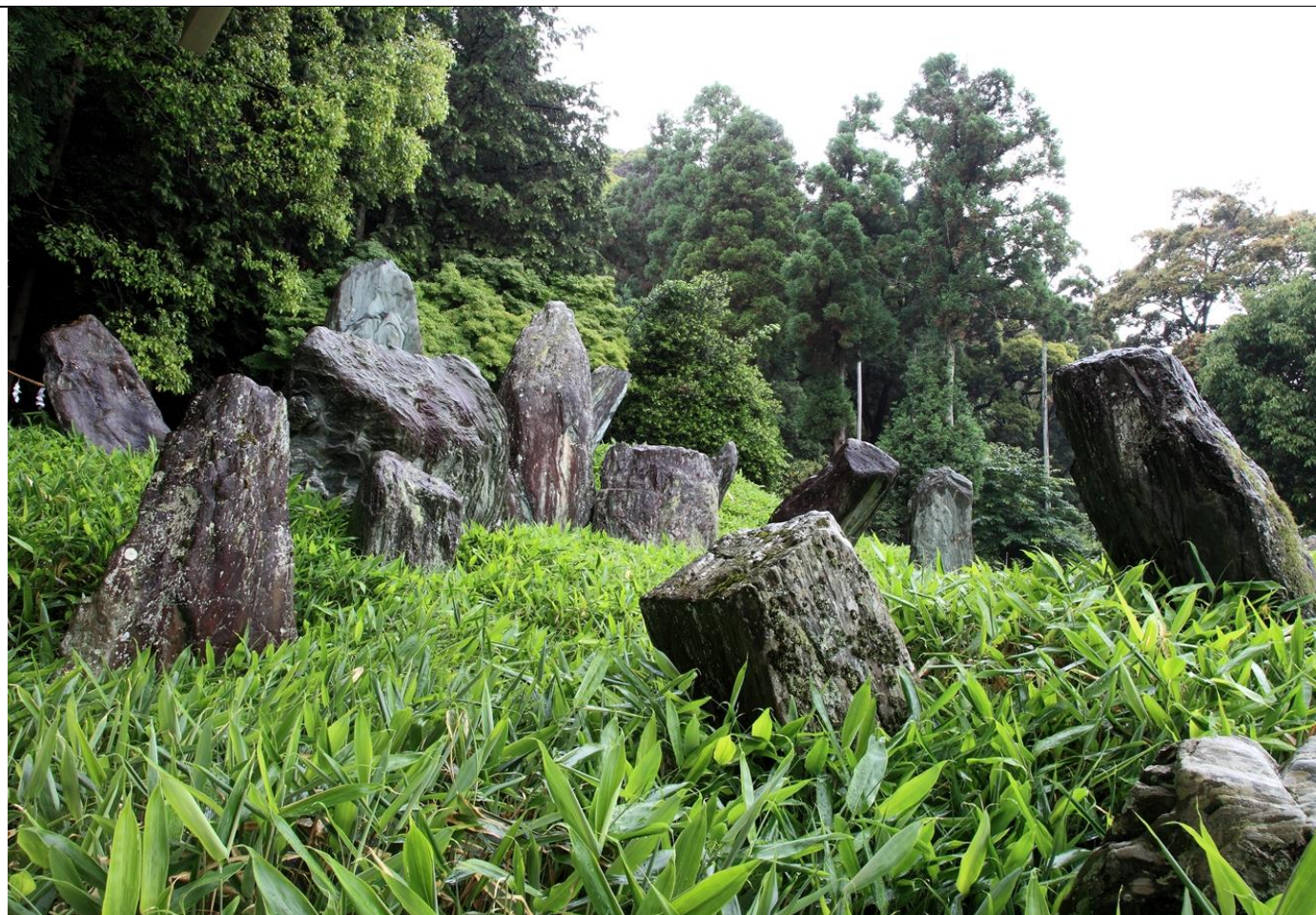


⑩桂家: 当庭は「L」字形の変形土地に円弧状に配石している。大徳寺本坊・圓通寺との関連性があるか。なお借景の庭でもある。

1.3.1 現代(中根・重森)によって作られた山畔への稀な地割による立体造形例。現代作家は多くの場合、山畔部の土地の確保が困難のため、作庭例は稀である。なお、下記の二庭における、石組部と自然部の関係性は対極にあると思う。



中根金作:足立美術館



重森三玲:松尾大社(背後の自然風景に対して、庭園部の石組は自然石を使用しているが、造形は全く人工的である)

1.3.2 現代(重森三玲):平坦部に作られた立体造形の庭を例示する

傾斜地で水に恵まれた土地は古来より将軍、社寺の庭が造られている。重森の作る事の出来る場所は平坦部しかなかった。しかし、このような場所でも常栄寺や龍安寺は傑出した庭園が出来たのである。これら2庭の事例からも解るように、山畔部での庭園は石組の妙を発揮し難いとも考えられる。常栄寺・龍安寺こそ重森庭園の原点ではないか。重森に与えられた平坦部での作庭条件は以下のような特長がある。①平坦部での石組みのため、石と石の有機的な繋がりを確保でき、動きのある芸術的な造形になる。②座敷からの座視鑑賞から解放され、移動しながら多視点の造形が楽しめる。③水に頼らない手法のため、護岸工事や防水工事が不要で、池泉庭園に比べ格段に安価なコストになる。



①井上家(1940):露地に多層配石で立体造形形成の成功例



②村上家(1949):平坦部への配石でも立体造形の形成例



③小倉家(1951):故郷の友人宅に重森の龍安寺を作庭



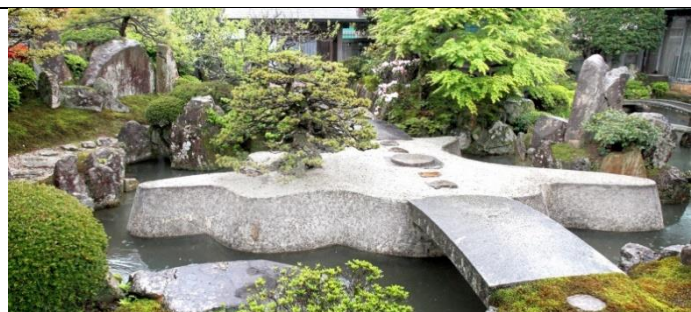
④前垣家(1955):高価な石でなく立体造形に富んだ石組例



⑤岡本家(1957):小さな石であるが自由な造形の特徴が



⑤ 織田家(1957):巨大な石組みを埋める周辺石組の対比



⑦村上家(1958):具象的な亀島に対して彫刻的抽象の鶴島



⑧小河家(1960):巨石群の造形が示す石組みの面白さ



⑨久保家(伊丹市 1970):正方形の敷地に豪華な石組み点在



⑩芦田家(重森 1971):三神仙島に石組の立体造形

1.4 多視点の造形を生み出す地割（連続的に変化する立体造形）

①岸和田城(19653) 一般的には庭園のビューポイントは一か所である。ところが重森は視点が動くに従って連続的に立体造形が変化する地割を創出した。その手法は近景、中景、遠景に豎石群を環状または多層的に地割することである。この地割を行えば視点が移動すると重なり合う石組が変化することになり、自から異なる立体造形が得られるのである。岸和田城と松尾大社を例示。



当庭は大將陣を中心として、八陣の石組みが環状に組まれているので、造形の変化は恰も万華鏡を見るようだ。



虎陣側より 詳しくは拙書『重森三玲 庭園の全貌』232 頁を参照されたい。



風陣側より：庭園は大將陣を中心に八陣が環状に組まれている。回遊すると造形は連続的に変化



龍陣側より：造形が連続的に変化する理由は、近景・中景・遠景への立石の地割だからだ



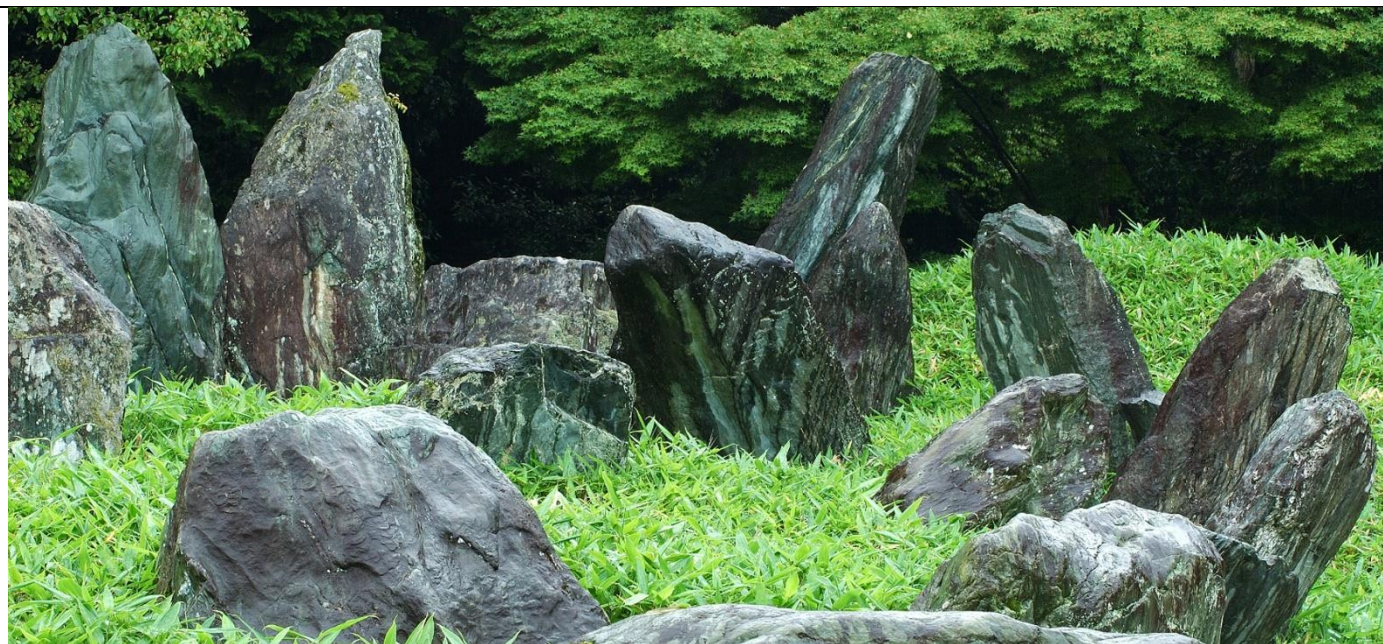
蛇陣側より（岸和田城へ上る階段より）：この視点からは、全景が一望できる。

②松尾大社（1975）

立石を多層に地割すると、視点を左右に移動すると連続的に立体造形が変化する。ただし山畔部が有効。



左側より景；山畔の斜面に巨石がほぼ三列に布石されているので、視点の移動で造形が変化する。



右側からの景：1 視点の庭が写真に例えるならば，多視点の庭は動画である。



中央からの景：中央からの景は安定して見えるが、上段の写真のような動きが無い。

2 錯覚を利用して奥行きをカバーする手法

絵画などで用いられてきた遠近法が庭園でも採用されるケースがある。有名なのは龍安寺の遠近法である。現代においては市街地で庭園としての広大な敷地を確保することは不可能に近い。よって必然的に狭い土地、または横長などの変形な土地でしか造園をすることが出来ない状況にある。このような不利な状況を克服するために重森は錯覚を利用した。

2.1 遠近法

手前に大きな石組を行い、奥に小さな石組をすると錯覚により奥行きのある造形に感じられる。



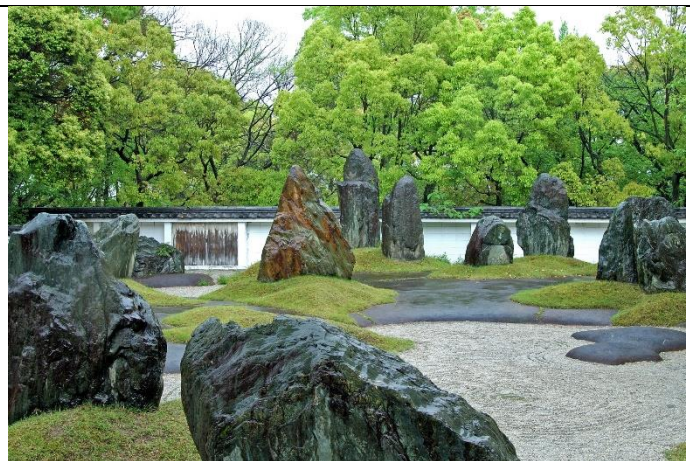
古典庭園：龍安寺（方丈から見た景、玄関から入った景とも遠近法効果があり、共に奥行きを感じさせる）



古典庭園：常栄寺（手前二列の石組は背後の石組より低くして、より大きな石を選択し、遠近法効果を最大にする地割に注目）



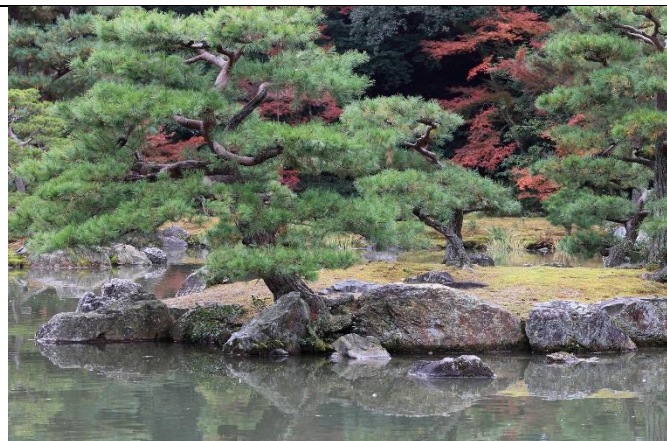
田茂井家（重森・1970）：巨大な三尊



豊國神社（重森・1972 大阪城内）

2.2 逆遠近法

作庭に使う石が、さして大きくない場合、その石の前に小石を置くと、背後の石は大きく見え、更に造形の奥行きが増す効果がある。造園用語では「捨石」と言うが、とんでもないことで、その有効性のため多くの庭で用いられている。福田寺の例は奥にある三尊石の滝が見るものに迫って来る巧妙な手法。



古典・金閣寺：捨て石の典型例



古典・福田寺：出島は低く、築山は高くして、三尊式枯滝が迫って来る



前垣家(重森・1955)：小さな石が手前にあると、奥行きが生じる。



瑞峯院(重森・1961)：競り上がる造形(手前の小石で石組みが上昇)

2.3 庭園の手前に立石があると、背後の景色が動くように錯覚させる方法

重森は著書の中で斧原家庭園について記している手法である。「南方に高い築山を作り、これに多くの石組を施し、中間の出島は芝生敷きとして、一本一草を植えず、手前の出島には、小松五本を直線状に配して、書院の廊下を歩きながら一覧すると、築山方面の石組や植栽が、一種のリズミカルな動きを見せるのである。そしてこの出島の先に石灯籠を一基配して、出島を更に強調したのであった。」(『日本庭園史体系 No27 現代の庭(一)』137 頁)と述べている。



古典・天龍寺：手前の洲浜を見ながら移動すると背後の舟石が動いてくる



斧原家(重森・1940)：手前の出島に松を五本植えると、書院を移動した際、松の背後にある石組みなどが動いて見える。



瑞応院(重森・1956)：手前にある観音菩薩(左側)や勢至菩薩を見ながら、書院を歩くと背後の石組群が動いて見える



龍吟庵(重森・1964)：龍頭を見ながら、廊下を歩くと龍が動いて見える。

2.4 入れ違える洲浜で奥行きを感じさせる方法

古庭園では思い出されないが、重森では奥行を出す手法で一般的に採用されている。



斧原家（重森・1940）：直線の洲浜



前垣家（重森・1955）：起伏の洲浜



小林家（重森・1971）：青石の洲浜



松尾大社（重森・1975）：曲水の洲浜

2.5 長さ方向を強調させる方法（長さ方向の先端部に岩島、立石、灯籠を配石し、長さを強調）

この手法は洲浜・曲水などの自然風景を造形化するために東院・苔寺・天龍寺・桂離宮などで採用されている手法であるが、重森もこの手法を踏襲している。



東院（・平城京・750 年頃）：先端部分の立石は 60cm



桂離宮：栗石洲浜の物見灯籠

左記の栗石による洲浜から約 900 年後に同じ造形が



東福寺（重森・1939）：三本の臥石の両端に小石がある。



瑞峯院（重森・1961）：小石の作る余白、と逆遠近法

3 変形の土地に対応

狭い場所への作庭は不利と言うよりは、逆転の発想で臨めば抽象庭園を生み出すことになる。これぞ重森の真骨頂発揮で、独創性のある芸術性優れた創作庭園を生んだ。現代においては個人邸における作庭場所の確保は大変である。住宅の南側に面した土地で、しかも奥行きを確保することはほとんど不可能とさえいえる。

3.1 極小の庭

小さな場所での作庭は単純化する必要があるため、ハンデキャップと云うよりは、却って抽象庭園が生れる契機となる。



前垣家（重森・1955）：3石の抽象石組



桑田家（重森・1959）：大胆な坪庭



清原家（重森・1965）：立体抽象画と



龍源院（鍋島・1960）

3.2 Single Issue (主体となる造形のみ)

上記の極小の庭と類似の表現であるが、ここでは場所の狭さが問題ではなく、テーマの選択が重要であることを示す。狭い場所に庭をつくる場合、やゝもすれば多くの主張をしようとする。しかし、その方法は逆の効果を生むだけだ。狭いからこそ主張をしたいことを単純にすることで、主張したいことが鮮明になるのである。



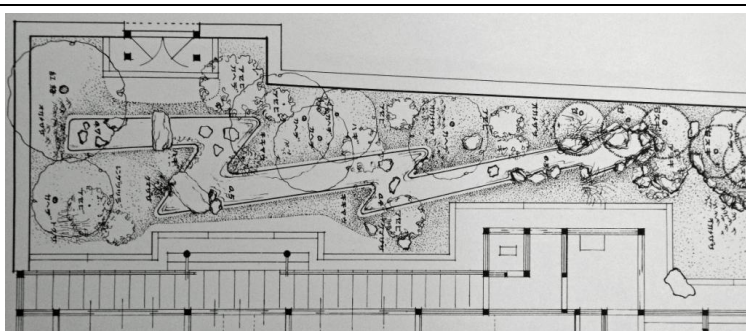
斧原家(S15)：洲浜模様の鮮明さ



漢陽寺(S44)：地藏遊戯のテーマのみ

3.3 間口の幅に対して奥行きが極端に浅い地形

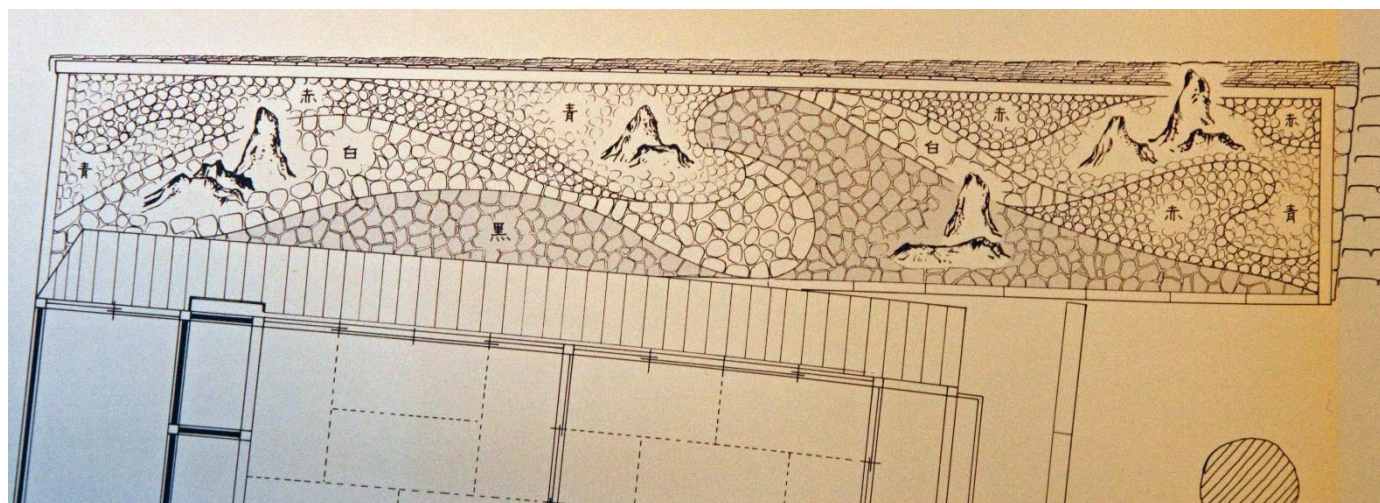
狭くても無理やり庭を作ったというよりも、狭いからこそ芸術性の高い庭が出来たというべきか。よくぞこのような地割を考え出したものだと感心する。



①春日大社(S12)：

建物と壁の距離は最も狭い場所では約 3m、幅が 20m以上の細長の敷地に遣水の造形を作った。

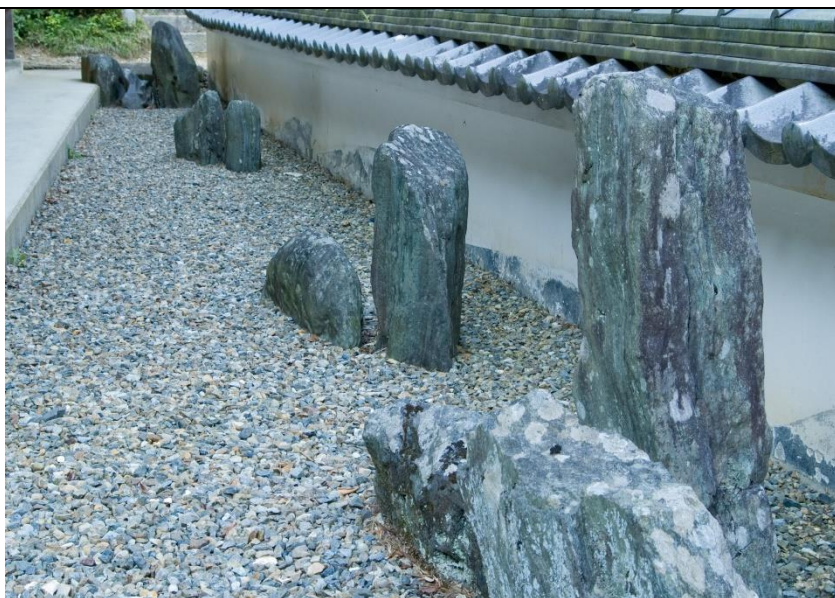
「 Z 」字型の遣水のパターンを二つ繋いだ。この長細い造形は稲光とも理解できるが、それは春日若宮の龍陣信仰に因んだからであろう。このような超横長の敷地にはあれこれの造形を詰め込むのではなく、一つのテーマのみを示すことにより、充分満足する庭になることを示した好例だ。



②本休寺設計図：この庭の敷地は幅が約 17mに対して廊下と壁の距離は約 3mに満たない。この狭隘な場所に七五三の立石を組んだ。これでは単に石が並んでいるだけだ、そこで重森は波濤の敷石を造形し、さらに壁には波濤の水墨画が描かれた。単なる石の配列が突然に芸術的造形に変身したのだ。この敷石の造形こそが羅列した石組みを瞬間に芸術作品にしてしまうのだ。



設計図の左側からの俯瞰写真



設計図の右側からの写真(現在は敷石部分に砂利が敷かれている)

4 借景

4.1 借景の理論

『伝統との対決』 岡本太郎著 ちくま学芸文庫 からの「岡本太郎語録」

「借景式の庭園」(146～148P)

雄大な自然を前にひかえて、箱庭的な自然の模写を重複して作るということは、せつかくの自然の眺めをぶちこわしこそすれ、これは全く意味がない。・・・大自然にまともにぶつかり、受けとめ、しかし、豊かにそれを生かしてゆく、自然美自体に創造的に参画するという技術が、どうしても必要になります。・・・

大自然の景観をまっこうから受け入れる。しかしそれを受けとめるために、何かしなければならなかったら、小細工をやめて、単純で強靱な手をうつ以外にありません。人間における抽象性、その明快さと単純さこそ大きな自然に対抗して、しかもそれを生かすことのできる形式なのです。

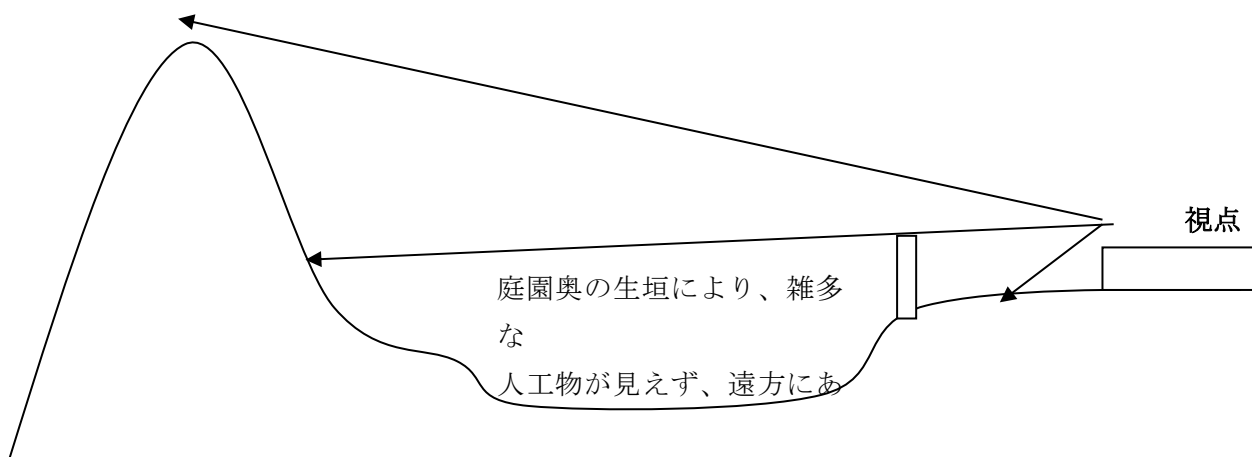
借景式の庭園というきわめて特異な、しかし驚嘆すべき技術は、繰り返して言いますが、おのおのの小さい場所に箱庭的な模写自然をつくりあげるのではなく、大自然そのままをこちらに引き込んでしまうのです。手前のわずかな仕掛けによって、遠い大自然が強引に引き寄せられ、小さいスペースにはまってしまう。と同時にまた、せまい人工のアレンジメントは広大な自然に溶け込んで、ひょうぼうとした広がりや気韻をただよわせはじめます。

つまり、大空間と小空間をギリギリまで異質として対立させる。その張りつめた関係は異質であればあるほど強力にはたらきあって、一つのありふれた平凡な自然空間を新鮮で驚異的な、芸術的空間におきかえてしまうのです。ところでその媒介となっているのは、二つの異質の空間のあいだにおかれた、空の部分です。

さきほど私が本当の借景式というものは、身ぢかにある庭と遠景のあいだが、断絶しているのが条件だと言ったのはその意味です。たとえば平原であったり、谷間であったり、あるいは低い土塀とか垣によって切りとられる。これが借景のもっとも重要なポイントです。

二つの対立的な空間のあいだを、自然に連続させる森や山つづきなどがあったのではぶちこわしです。それらはまったく不必要な邪魔者になって、異質な対決を失わせ、すべてを素朴で無感動なままの自然に戻してしまうからです。

構造：やや高台にある庭から庭の背後にある自然の山を望む



事例：圓通寺・龍安寺・酬恩庵など

4.2 古典庭園

4.2.1 古典庭園の全般

借景庭園とし最も有名な庭は圓通寺（京都市）である。石組みの背後には霊峰比叡山を頂いている。同じく比叡山を望む庭園として正伝寺の庭園も有名である。

一方現在は借景庭園であることを目視で確認はできないので余り知られていないが、龍安寺（『都林泉名所図会』下巻 118, 126 頁 講談社学術文庫）や、大徳寺方丈東庭（『都林泉名所図会』上巻 39 頁）が比叡山を借景としていたことは有名なことである。このほか真珠庵東庭や酬恩庵東庭、城福寺（越前市）、大通寺の含山軒（長浜市）、頼久寺（総社市）は、いずれも背後に神南備山を頂いている。これらの借景を頂いている庭園はいずれも平庭式の抽象枯山水である。このことは背景に大自然の野山がある場合は、庭園の中に人工の野山があったのでは、庭園の造形が貧弱に見えてしまう、そのために作者は抽象的な造形を模索することになるのである。つまり借景を取り込んだ庭は高度な抽象庭園を作ることになるのである。



① 円通寺と比叡山（本来は生垣背後の雑木林はなかったが、最近では新たなマンションを隠す為に樹木を茂らせた）



② 正伝寺と比叡山



③ 頼久寺と愛宕山



④ 城福寺庭園と神南備山



⑤ 大通寺含山軒と伊吹山

⑥ 大徳寺・本坊の借景



『都林泉名勝図会』上38P(1799年)：約220年前の本では抽象枯山水庭園は大自然の風景とコントラストをなしていることが解る。もし、この庭が築山や橋など大自然の縮小した景色であれば、陳腐な箱庭だ。



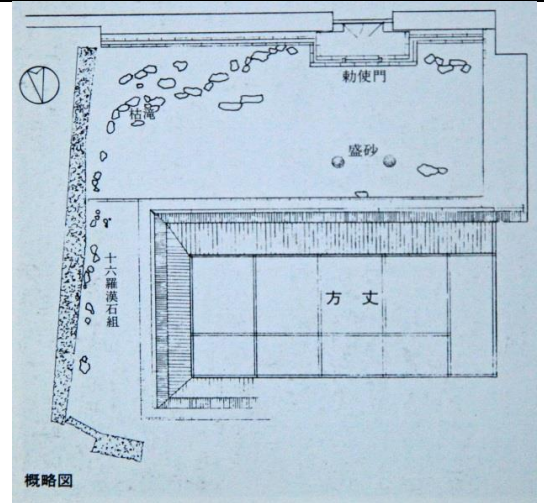
『京華林泉帖』湯本文彦著京都府(1909)：比叡山、鴨川を借景

⑦ 桂家



桂家庭園と大徳寺本坊の関係性

桂家（防府市・1712）：天神山の聖山が望めるように土塀は低くした借景の庭。
庭園の幅は奥ほど狭くした遠近法構成（上記大徳寺本坊の十六羅漢像部と同じ構成）



大徳寺方丈見取り図：弧状の石組や地割（方丈北側の幅が広い）は、恰も圓通寺や龍源院・龍安寺・雑華院・桂家庭園を思わせる。

⑧ 久留島家

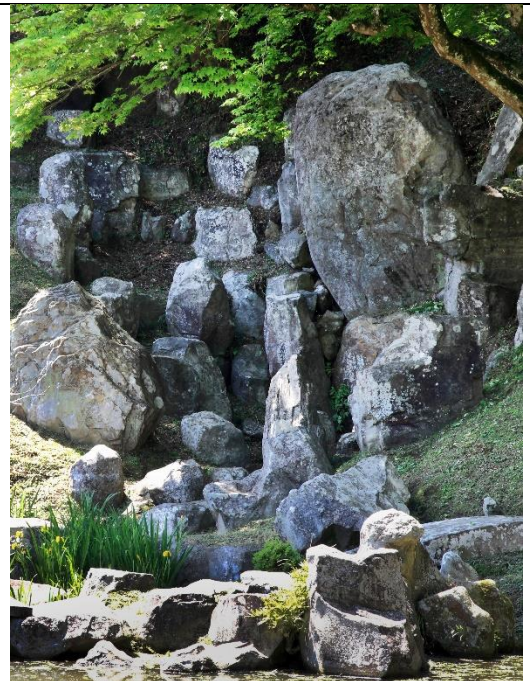
大分県にある旧森藩の藩主の庭である。藩主と云っても石高が14,000石であったため、城郭は持てなかったが、山頂に作った末広神社はまるで要塞であった。この神社周辺に気宇壮大な庭がある。



須弥山石組と背後の美しい山並みのコントラストが絶妙



栖鳳廊2階から俯瞰。「九山八海」を象徴



庄巻の石組



中央の四角錐が須弥山を象徴した「九山八海」をテーマとした

4.2.2 龍安寺と借景

1 龍安寺の現状写真



龍安寺の全景



東端の 5 石の石組みと壁際の 2 石を合わせて 7 石



壁際の小石は方向性がある



壁際の富士山型の石を斜め裏側から見る



土塀側の石組みは横三尊の石組みと焼け爛れたような 2 石であるが、特に右側の石は鋭角な稜線が目立つ。方丈側の 3 石の石組みは鞍のような形の石の前後に小石がある。

2 文献上のデーター

寛政 11 年（1799）に刊行された秋里籬島の『都林泉名所図会』118 頁には細川勝元が書院から毎朝男山八幡宮を遥拝するために庭に木を植えなかったことが伝承されていたことが解る。ところが、石庭が作られてから約 250 年経過した寛政 11 年頃には「古松高く老いて昔の風景匳（そ）となる」と書かれている。つまり昔の風景はまばらにしか見えなくなった、と書かれているのである。

また、126 頁には「当山に八景あり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。（東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雲山虬松、隣院紅葉）」とあり、方丈から八景が見えたことを具体的な景色が書かれている。

以上のことから、龍安寺は「借景あつての抽象庭園」であることが解る。

① 秋里籬島著『都林泉名所図会』下巻 講談社学術文庫 1412

118 頁

むかし細川勝元ここに別業をかまえ住せらるゝ時、書院より毎朝男山八幡宮を遥拝せんが為に庭中に樹を植えず。奇岩ばかりにて風光を催す。これを相阿弥の作りしなり。名づけて虎の子渡しといふ。洛北の名庭の第一なり。後年塀の外の古松高く老いて昔の風景匳（そ）となる。その上近年方丈回縁（火事で焼けること）しぬればむかしを情を慕われ侍る。

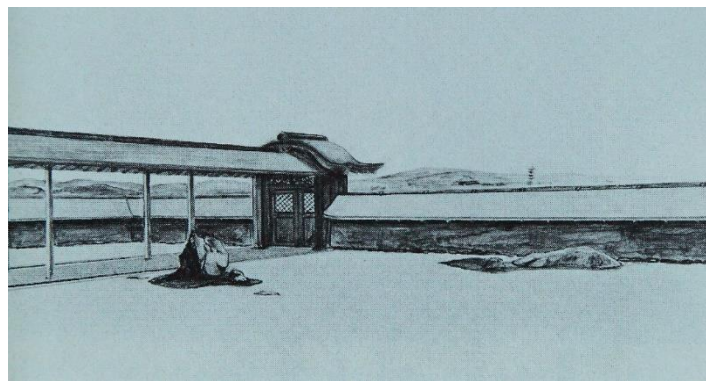
126 頁

龍安寺 の林泉は封境に名池あり、鏡容池と号す。冬日鴛鴦多く集まりて洛北の眺望世に名高し。池中に三つの島あり、中の島を伏虎といふ。また水別石というあり、霖雨の時この石上へ水越ぬれば西の方の樋を上げて水を落とすなり。三笑橋というは東の方にあり。当山に八景あり、是みな方丈よりの遠景を以て風色とす。（東山仏閣、八幡源廟、伏見城跡、淀川長流、東寺宝塔、花園暮鐘、雲山虬松、隣院紅葉）いわゆる方丈の庭は相阿弥の作にして、洛北の名庭の第一とす。庭中に樹木一株もなく、海面の体相にして、中に奇岩十種ありて島嶼になぞれへ、真の風流にして他に比類なし。これ世に虎の子渡しといふ。そもそもこの地は文明年中（1469～87）細川右京大夫勝本の別荘なり。この人書院に坐（いながら）にして遥かに八幡の神廟を毎事拝せんがために、庭中に樹木を植えさせずとなん。初めはこの地後徳大寺左大臣実能公述別業なり。同じく公有公の代細川勝元譲られしなり。

② 大山平四郎著『龍安寺石庭 七つの謎を解く』淡交社・『日本庭園史新論』平凡社より抜粋

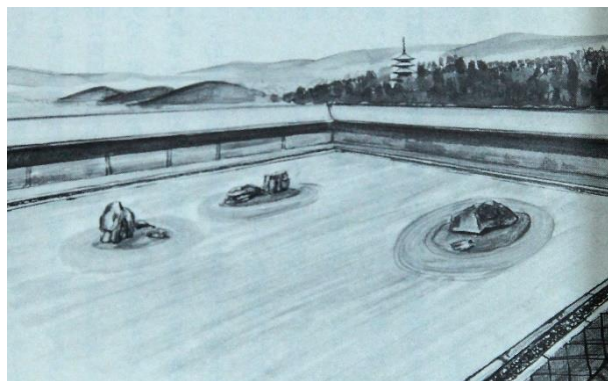
龍安寺は借景あつての抽象庭園であることが、大山平四郎著『龍安寺石庭 七つの謎を解く』淡交社（そのイメージが具体的に 22、45 頁に下記のようなスケッチが記載されている）と『日本庭園史新論』805～814 頁に詳しく書かれている。

① 推定外観図



方丈から見た石庭の東側風景

歩廊には壁が無く東庭と土塀越しに東山連峰が見えた。左にある石組群は東山と対照的に厳格に造形した。



方丈から見た石庭の東側風景

南西側の景色は仁和寺の五重の塔が見えたであろう、と推察している。

4.3 重森の借景論と借景庭園

4.3.1 借景論

重森の借景に関する記述を以下の二つの資料を示す。

二つの記述は一見矛盾するとも解釈できるが、考えようによっては矛盾するとも言い切れない要素がある。即ち『刻々是好刻』では、単に背景が見えるだけでは抽象庭園を引き立てることにはならないが、背景に意味があり庭園と好対照の場合は自然の背景と庭園の造形が反発しあい、緊張を生みだし、庭園の人工造形美を一層引き立てるとも解釈できる。

但し『日本庭園史大系 7』龍安寺においては「第一本庭のような庭では、借景を必要とする何物も無い。なるほど土堀の外には雑木林があり、目を遠くむけると晴れた日には、男山の森が霞んでみられる日もある」と龍安寺は借景によって庭園は引き立たないと、借景論を否定している。

借景に関する重森の文章を二点掲載する。

①『刻々是好刻』北越出版 林泉夏日抄（大自然と造形の調和）106 頁

先月から……………山の形や、山と山との接続がどんなになっているかを、自分の作品の庭の上に表現するために、あかず眺める癖がある。おかげで、先日も丹後網野の作庭に行っている時、急に四国の志度寺に行く急用が出来て、播但線に乗ったところ、和田山の次の竹田駅を過ぎたところ、荷物自動車と汽車の衝突で、約一時間ばかり汽車が止まったために、山上に高く見られる竹田城の石垣の美しいのが長く見られて嬉しかった。これまで、山上の城で美しいと思ったのは、山口線の津和野城の石垣だと思っていた。山上に高く近代感覚を思わせる城の石垣の美しい構成が、ともかく文句なしに美しいので、あそこを通る度に見て通ったが、竹田城の石垣を見るに及んで、これ又、更に一層美しいものだと思った。自然の美しい高山の上に、自然とはまるで正反対な、人間の作った一つの構成美が置かれる時、山全体を含めた一つの大きな芸術が構成されて来ることを高く評価せざるを得なかった。芸術はやはり自然と非自然との接続による構成の場合のみ、何か一層大きな美が出現することを識るのである。……………。

於福山桑田邸（昭和 34 年 8 月 1 日）

②『日本庭園史大系 7』龍安寺 76～78 頁より抜粋

それからさらに又、この庭に対して、本庭を借景様式のものとする人もいる。それは本庭が一草一木も無い石庭だけに、堀外にある雑木林の景を入れて、これを借景としたものだとか、遠く男山八幡宮の森を見るようにしてあるので、これを借景とみるのである。これは、背景さえあれば、借景だという考え方である。借景というのは、その庭園に必要な場合に限って、その背景を借景としたり、又そのように考え方である。

第一本庭のような庭では、借景を必要とする何物も無い。なるほど土堀の外には雑木林があり、目を遠くむけると晴れた日には、男山の森が霞んでみられる日もある。……………

それ故に、龍安寺庭園の場合は、様式上の問題から考えても、この石庭は一切の背景を必要としない、むしろ背景を拒絶している庭である。背景を拒絶することによって生きている庭であり、背景を否定するところに、この庭の芸術性があるのである。……………。今日なお本庭の堀の外の景を借景などとする人のあることを残念に思う次第である。……………。

それらの点を十分に考えぬ限り、龍安寺石庭を鑑賞し、又は云々する資格はないといってよい。

4.3.2 重森における借景庭園



① 西谷家（岡山県吉備中央町）昭和 4 年（33 歳）
最初期の庭であるが、崖の上にある、奥行きが少ない地形を生かした借景の庭である。立石の石組みは竹垣沿いの一列のみにして、手前には小さな臥せ石を中心にして奥行きを得ている。また竹垣は高さを低くして背景の郷里の美しい野山を取り込んでいる。



③ 織田家（愛媛県西条市 1957・61 歳）単なる借景庭園ではなく、背後の石鎚連山を象徴した巨石による石組み。



② 小倉家（岡山県吉備中央町）昭和 26 年（55 歳）
造形性の強い庭であるが、焼き板の板塀により背後の自然と混交することなく、互いの美しさを高めている。



④ 北野美術館（長野市・1964・69 歳）
背後の山並みを象徴するように三重の野筋を造形に取り入れた。



⑤ 興禅寺（長野県木曽町・1963）大自然の雲を背景にすることにより、人工造形の雲海の美がより際立って見える

Symbol & Technique of Japanese Garden

Author & Phtographer
Nakata Katsuyasu

Address

〒662-0826

Mobile:090-4812-3052

E-mail: j.garden@outlook.jp

Website: <http://www.musokokusi.com/>

表写真: The East Palace (東院) Garden

裏表紙: Maegaki-ke Family

印刷: 2019/2/25

非売品



Maegaki-ke Family